

我流子育て支援論

河岸 由里子

千歳で子育て支援を始めて、15年になる。夫の転勤で北海道に来て、自分の子育てが一段落したところで、たまたま家庭児童相談員になったことがスタートである。

当地は、空港と自衛隊の基地を抱え、人の出入りも多く、様々な層の人が集まる地域でもある。空港や港がある地域は、どこでも見られるように、複雑な家庭が多く、問題も多種多様になる。

当地の家庭児童相談員は3人おり、相談は、0歳から18歳までの、養護、養育、不登校、非行、療育など、多岐にわたっていた。保護者や子ども達の相談に応じたり、学校と連絡をとりながら、家庭訪問や学校訪問も度々行い、児童相談所の福祉司とも連携を取り合っていた。

子育て支援としての家庭児童相談員の活動の中で、当時の第一は不登校の相談であった。不登校については、適応指導教室などができ始めの頃で、漸く子ども達をつなぐ場所ができ、保護者と共に喜んだ記憶が新しい。今は、適応指導教室以外にも、フリースクールやフリースペースなど、選択肢が増えていて、子どもの状態に応じて対応してもらえるところがある。家庭教師が不登校の子どもに対応してくれるのは、保護者に金銭的ゆとりがあればとても助かる。ただし不登校でも、適応指導教室に通級したり、家庭教師と関われるならまだ良い方で、そういうものは一切拒否という子どももいる。そうした子ども達への支援は、

相変わらず、担任やスクールカウンセラー等による地道な家庭訪問と、保護者支援による遠隔操作しかない。

次に多いのが療育相談であった。現在では療育相談は家庭児童相談員の仕事から外れているし、当地外では療育相談を行っていないところが多かった。当地では、母子通園の指導員とともに、精神発達遅滞や運動発達遅滞、言語発達遅滞などの相談を受けていた。乳幼児健診での発達相談のほか、週1回、午後からの療育相談を実施していた。ところが、この療育相談がパンク状態になり、途中で発達相談室が母子通園センター内に設置され、私は、家庭児童相談員と言う立場のままそちらに異動し、3歳児健診と療育相談を担当することになった。今のように広汎性発達障害などはまだまだ一般的ではなかった時代で、そこで勤めていた3年の間には、気になる子ども達が目立ち始め、広汎性発達障害の問題が大きくなってきた。年間実数300あまり、延べ900件余りの発達相談に携わっていたが、それほど多く相談があるということは、健診で拾い上げる数が増えたことと、それだけ相談が一般的になってきたということなのだろう。発達相談は、今でも抵抗を示す保護者がいるが、早期発見、早期療育の名の下、母子通園につなげたり、グループ相談(気になる子の遊びグループ)を実施したりなどして、支援してきた子ども達の保護者と数年後学校などで会っ

た時に、「あの時通園に繋げてもらってよかった。」などという話を聞くと「良かった」と思うことも度々ある。今では出会った子ども達の中には立派に成人した子もいる。

そして三番目が虐待の問題である。今ほど虐待の問題が大きく取りざたされている時代ではなかったのに、ネグレクトでも児童相談所が子どもを一時保護してくれるなど、良い時代だったといえる。今は、ネグレクトで引き上げるほど児童相談所や施設にゆとりはないだろうが、ネグレクトも立派な児童虐待なので、その分地域では喧々諤々のやり取りが起る。児童相談所への批難ももちろん多いだろう。児童虐待については、子どもの命が守られなかった折には、公的機関が批難の的になるが、国の施策、予算の不足、また、諸外国のように親子それぞれの支援プログラム、家族再統合プログラムなどが、行政の指導の元、義務付けられてもいない現在、児童相談所で出来ることには限界がある。まして私ごときではどうにも出来ない問題である。児童相談所の業務がこれほど忙しいのは、虐待の問題に加え、広汎性発達障害の問題の増加も相談業務が滞る遠因になっているのではないかと思う。同様に、今の家庭児童相談員の仕事も煩雑化し、忙しそうである。

そして、最後に、さまざまな家族の相談があった。養育の問題、親子関係の問題、夫婦問題も含め、たくさんの家族に出会い、勉強させてもらった。

家庭児童相談員として働いていた8年間に、様々な研修に参加し、自己研鑽に努め、途中で臨床心理士の資格を取得することができた。その時点から、私の活動は飛躍的に広がることになった。

臨床心理士の資格を取ってからは、スクールカウンセラーの仕事を通じて、子どもとその保護者に携わってきた。小学校、中学校、そして、高校でスクールカウンセラーをして来たが、年々、子ども達と保護者の問題が多様化してきたと感じている。最初の頃の相談は、小学校では、母子分離不安やいじめ、発達障害による不登校や登校しぶりが殆どだったし、中学校では、いじめや非行問題、不登校、高校でも友人関係や不登校が主流であった。今も、主流は変わらないが、父母の離

婚・再婚問題、父母や兄弟など家族の精神障害或いは発達障害の問題、虐待の問題が増えてきている。子どもの問題の9割近くが家族の問題であると感じているが、その家族の問題が複雑化しているように思う。モンスター・ペアレンツと呼ばれる保護者の問題にも時折出会うが、モンスターではないが、子どものことに一生懸命すぎて、学校とトラブルになるケースも多い。また子どもや保護者だけではなく、先生方の精神障害も増加傾向にあると思う。

市の家庭児童相談員だったことの繋がりや、近隣の市の保健センター等で、保健所と共に行っている虐待予防のための「子育て検討会」のスーパーバイザーとして関わるようになり、多くの子育てに関する問題を検討する機会も得ている。活動範囲は五市にまたがり、市によって地域特性らしきものも見られる中、ここでもやはり保護者の精神疾患、発達障害、人格障害はじめ、離婚、再婚、再再婚などの家族の問題も増えてきた。虐待までは行かなくても、リスクの高い家庭のなんと多いことか・・・。

また、教育委員会でも相談を受けており、小中学校の子どもたちの相談や、学校からの相談にも応じている。教育委員会では、基本的には、いじめ、不登校と発達障害の相談が主体になっている。

平成16年に個人事務所を開設し、乳幼児から老人まで、あらゆる相談を受けるようになったが、全相談の6割程度は子どもに関する相談である。公的機関で無料相談を受けている関係で、私設事務所での同様の相談を有料化することに抵抗を感じ、市内の小中学生、及び高校生については無料相談を実施している。そのため、私の事務所は、赤字経営で、スクールカウンセリングなどで得ている収入を維持費に当てている状態である。

その様な中、地域に子育て支援機関がつつぎ生まれ、それぞれが様々な活動をはじめたが、横のつながりが比較的弱いことに気付いた。これでは、支援を求めてきた親たちが、たらい回しにされかねない。そこで「子育て支援を考える会」を作った。この会は子育て支援をしている人のための会で、福祉団体として登録し、年6回の研修を実施しながら、各機関の横のつながりと、支援者

としての知識、技能の向上と、ピアカウンセリングの役割を担えるよう、心がけてきた。その活動も6年になる。6回の研修のうち1回は一般向講演会を開催し、様々な講師の方に来ていただき、一緒に勉強してきた。この会でも親子の様子が沢山語られる。虐待、DV、精神疾患など最近の親の問題や子どもの問題、学校や保育所、様々な機関に所属している会員からの現場の様子、子育て支援についての各自の考え方などを自由に話し合い、愚痴をこぼしたり、議論を交わしている。

また、広汎性発達障害など、かつて、軽度発達障害と呼ばれた子ども達の保護者の会「フレンドリー カフェ」も立ち上げた。健常児だけではなく発達障害のある子を持った親の育児支援も必要と感じたからである。同じ悩みを持つ親同士の支え合いだけではなく、専門家も入っており、子どもの年齢も幼児から高校生までいるので、こまごまとした母親たちの子育て上の問題解決から進路の問題まで、気楽に話せる環境となっている。現在は月1回の母親の会「ママ カフェ」と二ヶ月に1回の父親の会「パパ カフェ」が開催されている。

様々な仕事を通じて、仕事内容は広がり、家事調停委員や大学講師、企業カウンセラーなども行っており、日々居場所が異なる。個人事務所での仕事も含め、月平均1000km以上を車で移動をしながら、地域を主体に活動している。北海道は広いが、車での移動が比較的楽なので、片道200kmくらいまでであれば、日帰りで仕事をしに行くこともある。例えば千歳 札幌間は高速で30分余りで、ETC割引が助かっている。但し、今回の高速料金の改定で、一部値上げになるとされているその一部に千歳 札幌間が入っていることはちょっと不満であるが・・・。

さて、このように地域で長年活動を続けていることのメリット、デメリットは何か？

メリットとしては、子ども達を縦軸で見ることができ、どこかで相談に上がってきた子どもの家族背景などをつかみやすいこと、関係諸機関との連携がとりやすいことなどであろう。また、あちこちの機関と繋がっていることで、一つのケースについて多機関が関わる時など、守秘

義務の範疇ではあるが、その繋ぎになることが可能であるし、ケース理解に役立つことも多い。更に、子どもが小さい時に相談した経験から、再び子どものことや親自身のことで悩み事ができた時に、相談に来易いということもあるようだ。

一方デメリットとしては、相談者側からすれば、「知られている」人がそこにいることがかえって不安な場合もあるだろう。東京のような大都会にいるわけではないので、買い物に行っても、知っている人に会う確率が高くなってきて、出来るだけ人のいない時間に買い物に行ったり、人の顔を見ないようにしながら買物をしたりなどという工夫も必要になっている。そのお陰で、知り合いに気付かず、目の前まで来て挨拶されることも度々である。また、小さい町では、「このカウンセラーは駄目だ」という噂が少しでも立つとあっという間に広がり、仕事にならなくなるというリスクも背負っている。人間関係の失敗は極力避けなければならない。

メリット、デメリット両方あるものの、私が関わった子ども達が親の世代になり始めている今、地域に根付いた仕事と言うのも、子育て支援としては重要だと感じている。

こうした子育てに関する相談、コンサルテーション、あるいはスーパーバイズの仕事を通じて、日々、子育て支援そのものについて考えるようになった。子育ては昔と今とそれ程違うのだろうか？ どうしてこのように、子育てが難しくなってしまったのだろうか？ なぜ子育てに、これだけ閉塞感が生まれるのか？ また、子育て支援は一体どこまで続ければ良いのか？ 何が本当の意味で「良い支援」といえるのだろうか？

子どもを育てるということは、楽しいことよりも、苦しいこと、辛いこと、悩むことのほうが圧倒的に多いだろう。今までお会いしてきた、父母の殆どが、子育て、親育ちで悩んでいる方ばかりであった。そんな大人たち、そして子ども達のために、少しでも子育てが楽になることを目標に支援を続けてきた。今まで行ってきた子育て支援について、これからゆっくりまとめてみようと思う。